アイサップ ニュースレター

第8号

2010年5月15日発行

ISAPHはラオスとマラウイの母親と子どもたちの保健の向上を支援しています

NPO International Support and Partnership for Health

写真：托鉢して歩くラオスのお坊さんたち

JICA草の根事業「生き生き健康村づくりプロジェクト」に従事して1年

私は2008年4月よりISAPHラオス事務所に勤務する看護師・保健師の岩田和子と申します。ISAPHに所属する前にもラオスで青年海外協力隊員やJICAプロジェクトで看護技術や管理業務についての技術移転活動をしてきたのですが、ラオスの地方の保健医療状況について知らなかった面もあり、戸惑うことも多々ありました。

2009年1月からJICA草の根事業が始まり、新しいプロジェクトではありますが、対象地域を1つに絞り、もともとISAPHが実施してきた活動に加え、集中して栄養・衛生・乳幼児の育て方に関する住民の知識を底上げするための活動を主に実施しています。

プロジェクト開始に伴い、これまでの既存のデータとともに詳細な保健情報収集が必要となり日本人専門家による保健衛生の状況や、育児、寄生虫の感染率、対象地区の井戸水の調査が実施されました。これらの調査により、対象村での健康面での問題点がより明確になり、その対策や活動の計画が立てやすくなりました。

平行して、対象村には井戸が極端に少なかったので、住民と会議を持ち井戸の設置について話し合いました。その後、業者による井戸の掘削の工事が始まり、およそ半年かけて12カ所の深井戸

支援した井戸で水汲みをする住民

が完成しました。12カ所完成させるために11カ所が掘り損じとなり、深井戸の掘削がいかに難しいものかを思い知らされました。井戸の設置場所についても、住民同士の利害が絡み、設置場所の変更を余儀なくされた際、了承会議の席で、怒って帰ってしまう住民もあり、ISAPHの活動にどう影響するか心配されましたが、井戸が完成すると村のあちこちで水汲みをしている笑顔の住民に出会いました。

ISAPHではこれまでにも毎月対象村において、郡保健局職員中心で実施する乳幼児の身体測定、妊産婦の健診、予防接種、家族計画、巡回診療活動をサポートしてきましたが、これからはそれに加え基本的な保健衛生や、栄養、育児などについての教育活動を更に活発化させる予定です。

対象村の住民への健康教育活動

これまでは日本人職員が村を訪れた時、住民に挨拶しても逃げ出したり、返事がなかったこともよくありましたが、現在では挨拶も返ってくるし、向こうから声を掛けてくれる人も現れるようになりました。少しずつですが活動に参加する人たちや協力してくれる人たちも増えてきています。プロジェクト実施期間は3年ですが、対象村では農業を中心とした昔ながらの生活が営まれているのと同時に風習が重んじられ、迷信までも信じられており、経済的な問題もあるため、いきなり近代の習慣は受け入れられにくい状況です。

JICAから予算支援を受け、ISAPHの皆さんや聖マリア病院の関係者の方々に協力してもらいながら、現地の人々と楽しく、息の長い活動ができたら良いなと思っております。

今後とも皆様の温かいご支援、ご指導をよろしくお願い申し上げます。

（ISAPHラオス　岩田和子）

ラオスからの報告

ラオスでは、JICA 草の根事業「生き生き健康村づくりプロジェクト」の活動の他に、従来 ISAPH が行ってきたプライマリヘルスケア活動の第 2 フェーズを実施しています。草の根事業では、活動を行う前の状況を把握するために、ベースラインサーベイを行いました。また、昨年と同様、今年も専門家の派遣により、プロジェクト活動の強化がはかられました。さらに、聖マリア病院や東邦大学からのスタディツアーの受け入れや臨床研修医のフィールド研修の実施など人材育成の活動に取り組みました。また、念願のラオス研修センターが野田基金によりようやく建設され、今後、内外の研修に大いに役立つものと期待されます。

ベースラインサーベイを行って見えたこと

JICA 草の根技術協力事業が 2009 年 1 月より ISAPH の活動地域であるラオス国カムアン県セバンファイ郡シーブンフアン地区において開始されました。今回、プロジェクト活動の実施に必要な基礎情報を収集するため、ベースラインサーベイを県・郡保健局と実施しました。調査は 5 歳未満の子どもがいる母親 100 人に質問票を用いた聞き取りとその母親が持つ最年少児の身体計測をしました。

母親へのインタビューを行っている

ベースラインサーベイの結果から、①部族により内容や期間に差はあるものの食物タブーは依然として実施されている、②乳幼児の栄養摂取状況について出生直後から水やモッカオを与えている、③炭水化物は摂取しているが、その他のたんぱく質、野菜、くだものなどは摂取が少ない、④飲み水を沸かして飲んでいる人は 40% と少ない、⑤トイレの後や母乳を与える前に手を洗う人が少ない、⑥低体重児の割合は全体で 30% であり、年齢が大きくなるにつれ増加する、⑦身長別体重による急性栄養失調児は全体の 15% にみられた、⑧低体重児および急性栄養失調児とも女児より男児に多いことなどがわかりました。

調査の実施により今回得られた教訓として、調査インタビュアーに対してトレーニングを行いましたが、個々の質問に対して、それぞれの解釈で実施していたこと、身体計測者にインタビューをさせていたインタビュアーがいたこと、入力を急ぐあまり、回答の確認が十分でなく、その後の確認に時間がかかってしまったことなどが挙げられます。次回は上記の点を改善し、よりよい調査を実施したいと思います。

（ISAPH 齋藤智子）

ISAPH 活動第 2 フェーズの進捗状況

ISAPH の活動の第 2 フェーズが一昨年 6 月より始まり、そろそろ 2 年を迎えようとしています。第 1 フェーズでは乳幼児の成長測定と妊婦健診の実施体制の整備を行ってきましたが、この第 2 フェーズでは、その質を高めるための活動を行っています。最近では、ISAPH 職員と県・郡保健局職員との連携が良くなってきたことが見受けられます。現在は、県・郡保健局と話し合いを行い、身体測定と妊婦健診の技術確認表およびそれらの活動の評価表のたたき台を作成し、その修正段階にあります。村人の ISAPH の活動の意義についての理解も深まり、今ではほとんどの住民が参加しています。以前、何かと活動に対して厳しい態度や意見を言っていた県保健局のカウンターパートの態度も変わってきて、最近、保健省へも「ISAPH はいい活動をしている」などと報告しており、ISAPH への理解が見られます。これは大変うれしいことです。

また、昨年より、ISAPH 職員であるブンコン氏を中心にパネルシアターを用いた栄養に関する健

康教育を実施していますが、今年１月に母親を対象に理解度を測る聞き取りをした結果、健康教育の内容を聞いた直後でもよく覚えていない人がいることがわかりました。そのため、いくら視覚に訴えるパネルシアターを使用しても、大切なフレーズ（肉や魚を食べると体が大きくなるなど）を繰り返し言う必要があることを実感しました。

このほか、衛生環境向上のための水源整備として 12 カ所の井戸の設置を昨年行いましたが、故障もあるため、井戸の会社および郡保健局とともに使用状況の確認をする必要があると思います。最後に、現在進行中である野田基金による研修センターの建設は順調に進んでいるようです。郡保健局による木材提供の手続きが滞りなく行われれば、このニュースレターが発行される頃には完成しているものと思われます。今後とも ISAPH へのご支援よろしくお願いいたします。

（ISAPH　齋藤智子）

野田基金による
野田教授メモリアル研修センター

ISAPH の故野田進士理事のご遺族からご寄付頂いた資金で研修センターを建設いたしました。この研修センターのセバンファイ郡への譲渡式と開所式典が４月７日に行われました。故野田理事は生前、聖マリア病院と ISAPH の連携で実施されている初期研修医のフィールド研修などの人材育成活動を高く評価されており、その故人の遺志を継ぎ、ISAPH では、スタディツアーでの研修や地元の住民保健ボランティア育成研修のための小規模な研修センターを建設する運びとなりました。この建設には、セバンファイ郡の強い要望もあり、建設に必要な木材の一部と敷地の提供の他、電力、水道等の管理費も郡で賄うということになりました。

研修センター開所式典の様子

建設された野田教授メモリアル研修センター

開所式典には、野田佐智子夫人、聖マリア病院井手理事長、ISAPH 小早川理事長が日本より参加されました。野田ご夫人の挨拶では共に感極まって涙する参加者も多く、野田ご夫妻のラオス保健医療発展への深い想いが込められた研修センターであることを改めて感じることができた式典でした。その後、バーシーというラオスの伝統儀式が執り行われ、参加者の方々もラオスの文化に触れることができたのではと思います。今後は ISAPH の活動に役立てるだけでなく、他の機関にも利用されるような研修センターになるよう望みます。

ラオスのナショナルスタッフ紹介

私はヴィパーハック・ワンナラートといいます。ISAPH ラオス事務所に 2005 年の 10 月 1 日から勤務しています。乳幼児の成長測定時のモニタリング業務や地域保健ボランティアのトレーニングをしています。また、健康教育の技術向上のためビエンチャンの母子保健病院へ３週間研修に行かせてもらいました。巡回診療の手法についても、セバンファイ郡保健局のチームとともに研修を受けています。

私は、ISAPH で働くことによってこのように新しい知識をたくさん得ることができ、良い経験をさせて頂いています。また、活動を実施している３地区での人々の生活について知ることができ、嬉しく思っております。ISAPH は３地区の住民の支援だけでなく、そこで働く私の経験や知識を積むための支援もしてくれていることに対し、心から厚く御礼申し上げます。

私自身は感謝の気持ち以外、何も持っておりませんが、これからも ISAPH のために精一杯働きたいと思います。どうもありがとうございました。

（翻訳　岩田和子）

ラオスにおける人材育成活動は重要課題です

ISAPH では「相互の知識と経験を活かした保健人材育成支援 」を活動の柱の一つとして掲げ、人材育成を重要課題と考えています。例年、東京女子医科大学の学生によるスタディツアーに協力するとともに、聖マリア病院職員のスタディツアーや聖マリア病院臨床研修医のフィールド研修を支援してきました。2009 年 9 月には、初めて東邦大学の看護学生のスタディツアーを受け入れる機会も頂きました。すでに実習を終えた学生さんであったこともあり、日本の病院との違いに驚きが隠せない様子が伺えました。また、本年 3 月末には助産師学会によるラオス国スタディツアーも初めて受け入れました。多くの方々にラオスの医療現場を肌で感じ、ISAPH の活動への理解を深めていただく機会を持つことができて大変嬉しく思っております。

ラオス国スタディツアーに参加して

平成 21 年 11 月 3 日から 8 日まで 5 泊 6 日のスタディーツアーに、ラオスへ看護師 2 名、介護福祉士 1 名、作業療法士 1 名の計 4 名で、特定非営利活動法人 ISAPH の活動を見学させて頂きました。主な活動内容は、妊産婦・乳幼児健診による健康管理で、その他に手洗いや入浴の保清習慣が十分でない住民に対し、井戸の設置やその管理支援、手洗いの指導や飲水は沸かす必要があること、トイレ建設支援などを行っていました。

医療制度は日本とは随分違い、病院で診療を受ける場合の料金は前払いで、薬、注射器なども病院に在庫がない場合には処方箋を持って院外にある薬局へ買いに行かなくてはなりません。また、入院しても患者さんに食事はなく、日本のような看護をしてもらえるわけではないので、家族の誰かが付き添うことが要求されます。医療保険制度はありますが、会社単位で積み立てをしている人しか加入できず、一般市民への制度の整備が遅れています。このため、現金収入の少ない農村に暮らす人などの医療費は全額個人負担になります。

また、ラオスでは病院で亡くなると寺に入れないという風習がいまだ守られており、重症患者や、治療が長引きそうな患者は家に帰すことが当たり前と言う状況には驚きました。日本では考えられない事だと思いました

スタディツアーの参加者

この度ラオス・スタディーツアーに参加させていただき“当たり前”の日常は“有難う”と感謝の日々だということに気づかされました。引率して下さった浦部先生をはじめ御尽力頂いた各関係者の方々に深く感謝致します。

（聖マリア病院リハビリテーション室　佐藤利幸）

ラオスにおけるフィールド研修

平成 22 年 2 月 11 日から約 10 日間国際保健事業の研修でラオスを訪問しました。研修内容はラオスにおける乳児の栄養状態について、主にビタミン B1 欠乏の調査を行い、その対策を立てることでした。

調査を開始して、まず感じたことは保健事業を行うこと自体の大変さでした。調査対象となったトゥン村では道は舗装されておらず、家は掘立小屋同然でした。雨期には道は水没し移動手段はなくなり、家は雨風をしのげないと思われました。また、乳児の栄養状態についてはISAPH が行っている活動によりビタミン B1 欠乏は改善傾向にあるようでしたが、依然として子どもたちの発育状態は不良でした。もともと食べ物自体が少ない上に、授乳婦における食物タブーや、乳児に早くからモッカオ（もち米を咀嚼し蒸したもの）を与えるなど古くからの慣習が乳児の栄養障害に拍車をかけていました。また、衛生面の改善やインフラの整備、村人たちへの教育も含め開発途上国における保健事業の大切さと、それを行う大変さを体感しました。その中で保健事業活動を進め、その成果が出た時の達成感もまた図り知れないものだろうと感じました。

研修医と現地スタッフ

いろいろなことを経験し、大変勉強になり刺激を受けた研修でした。どうもありがとうございました。

（2 年次初期研修医　坂井淳彦）

ラオスってどんな国？（4）- ラオスの結婚式

自宅で行う伝統的な結婚式

2009年11月、首都ビエンチャンで行われたソムピットさん（ラオス事務所職員）の結婚式に参加してきました。私にとってはラオスで参加する初めての結婚式。張り切って衣装も新調し、やや緊張気味での初参加となりました。

まず、午前中は自宅での伝統的な結婚式が行われました。普段お化粧をしない彼女もさすがにこの日はバッチリメイク。とっても綺麗です。行進してきた新郎が家に入るのを新婦の親族が拒む寸劇のような押し問答や、木綿の糸を手首に巻き合って新郎新婦の幸福を願うバーシーと呼ばれる儀式、寝室のベッド上での記念撮影などなど、ラオス独特の慣わしが満載です。

夜には高級な会場で披露宴

そして夜にはビエンチャンでも特に高級な会場にて披露宴が開催されました。どこの会場でも、入り口にはまずお祝儀回収台が設置されています。招待状の封筒にはそれぞれ名前が書かれているので、その封筒にお祝儀を入れて（きちんと糊付けして）渡すのがラオスでの正しいお祝儀の包み方だそうです。ここでは新郎新婦に加え、両親、親戚がずらーっと並んで招待客をお出迎えしてくれました。披露宴ではウェディングドレス姿が見れるかなぁと少し期待していましたが、やはりラオスの伝統的な衣装＆おだんごヘアーでした。最近日本では白無垢を着ることが少ないのに比べると、まだまだラオスでは伝統が継承されているようです。

一緒に参加したラオス人職員の入念なお化粧待ちで、会場に入るのが開始直前になってしまい、どのテーブルももうすでに人でいっぱい。特に大きな会場だったため、舞台が遠くにポツンと見える席でした・・・残念。この日はなんと、1000人以上もの人が参加したそうです！各テーブルには料理やお酒が用意されているのですが、驚きだったのは２人の写真ラベル付きのワインまで用意されていました。さすが、豪華婚。

食べて飲んで踊って解散

披露宴の流れとしては、まず新郎新婦と家族の紹介などが行われ、乾杯の後食事がひと段落する頃に、ラオス恒例のダンスの始まりです。初めにお披露目として新郎新婦が２人で踊ります。そして本来はここから、みんなでダンスタイム！となるのですが、今回は新郎側の関係で偉い方の出席が多かったためにそんな雰囲気でもなく、年配の夫婦が社交ダンスを踊ったりするのをただ眺めて過ごしました。と、ここでもう自由解散です。踊りたい人は何時まででも残って踊る、帰りたい人は帰る。少し寂しい気もしますが、この食べて飲んで踊って解散が披露宴の流れです。日本のように感動的でウルウルというよりは、みんなでわいわいという楽しい雰囲気が基本のようです。

このように、ラオスで初参加の結婚式がとっても豪華だったために驚きの連続で、滅多にできない経験をさせてもらいました。結婚適齢期のスタッフが多いラオス事務所。次は誰の結婚式に参加できるか楽しみです。ソムピットさん、末永くお幸せに！　（ISAPH ラオス　藤倉　友）

ラオスで盆踊り大会が開催されました

ラオスの首都ビエンチャンでは年に一度、ラオス日本人材開発センターと日本人会主催による盆踊り大会が開催されます。10月10日に行われたこの盆踊り大会において、昨年に引き続きISAPHの活動紹介のパネル展示と寄付金箱の設置を行いました。

盆踊り大会というだけあって、会場の中央には大きな櫓が組まれ、日本食の屋台が広場を囲んでおり、ISAPHと隣のJICafe（ビエンチャンにあるNGO-JICAジャパンデスクという情報交換の場）のみが展示ブースでした。夕暮れ時、広場の提灯が点り雰囲気が出てくると、人もどんどん集まり始め、出張スタッフ総出でラオス語、日本語、英語での対応に追われました。

日本人会主催の盆踊り大会

今回ISAPHのラオス人スタッフからはルアンさんとトゥクさんが参加しました。自分たちがいつも行っている活動を「説明する」という広報活動は初めてで、最初は戸惑っている様子が伺えましたが、次第に笑顔で接する姿も見られ、きっと良い経験になったことと期待します。ありがたいことにラオス在住の多くの日本人の方々がブースに来てくれましたが、参加者の大多数であるラオス人の姿は比較的少なかったことは残念でした。どうすればもっとラオス人に来てもらえるかが課題として残りました。

和太鼓の勇壮な演奏や、浴衣姿のラオス人たちの盆踊り（時おりラオスの民族舞踊）を眺めながら、ラオスであることをしばし忘れてしまう素敵なイベントでした。　（ISAPHラオス　藤倉　友）

ラオスへ専門家派遣

JICA草の根技術協力活動事業の専門家派遣活動として、前号でお知らせした水質調査の甲斐田専門家以降、21年中は3名の専門家の派遣を行いました。

2月22日～3月5日まで、聖マリア病院国際事業部の杉本孝生氏にプロジェクト管理（主に経理）専門家として、管理体制（特に会計）の確立並びにプロジェクト計画実施状況の確認をお願いしました。

4月19日～5月1日まで、聖マリア病院国際事業部の山崎裕章氏に寄生虫検査と現地における技術指導のため派遣をお願いしました。

7月26日～8月8日まではISAPH事務局より磯東一郎氏がプロジェクト管理・教育教材作成指導のためラオスへ派遣となりました。

マラウイからの報告

ムジンゲコミュニティ・プロジェクトの現状と今後のISAPH活動

ムジンゲコミュニティ・プロジェクトの進捗について、大きな動きは今のところありませんが、近隣のヘルスセンターによる5歳未満児の診療（under 5 clinic）により、体重測定、栄養失調児の把握、予防接種を実施しています。その他、村で保健活動をしている政府の職員であるヘルス・サーベイランス・アシスタント（以下、HSA）による治療薬（鎮痛剤、ペニシリン、経口補水塩）の保管と配布、喀痰塗沫標本の作成、家族計画の実施、薬剤浸漬された蚊帳の配布、また、ボランティアによるエイズ相談会の開催、2村での医薬品回転システムなどが実施されています。

ヘルスポスト建設が村人の努力で無事終了し、故ジワ氏の長年の夢であった村人が医療の恩恵を受けることについて、今のところ主として子どもではありますが、実施されています。今後ISAPHとして、これでよしとしてプロジェクトを終了するのか、更なる支援をするのか、現地のニーズやISAPHの状況を踏まえ、検討すべき時期にあると思います。現状を維持する場合、ムジンゲ村は首都のリロングウェから遠く、また、通信事情も悪いため、現地との連絡係をしてくれているジワ夫人やチャリティさんが今までのように無償で活動をモニタリングすることには限界があります。ISAPHの財政上、日本から定期的に現地に赴きサポート活動が十分にできないことを考えると、ジワ夫人やチャリティさんにモニタリング費用を支払い、一年に一回は現状報告をしてもらうようなシステムを構築する必要があると思われます。　（ISAPH　斎藤智子）

ISAPHの歩み

2009年4月～2010年4月

- 2009年4月19日～5月1日
  聖マリア病院山崎裕章氏がブンフアナー村母子の腸管寄生虫の現状調査、セバンファイ郡病院及びヘルスセンター職員の検査技術指導のためラオスに派遣
- 5月18日～19日
  カシ地区・シーブンフアン地区合同VHVトレーニング実施
- 6月11日
  シーブンフアン地区ブンフアナー村にて1歳未満児の死亡原因聞き取り調査を実施
- 7月26日～8月8日
  ISAPH東京事務局長磯東一郎がプロジェクト管理及び健康教育指導のためラオスに派遣
- 7月31日
  第二期プロジェクト年間評価会議の実施
- 9月14日～16日
  東邦大学看護学生対象の「ラオス国スタディーツアー」11名受け入れ
- 9月14日～17日
  カムアン県保健局と共に新型インフルエンザ予防健康教育活動実施
- 11月3日～8日
  聖マリア病院職員を対象とした「ラオス国スタディーツアー」5名受け入れ
- 2010年1月
  シーブンフアン地区3村を対象とした栄養に関する意識調査の実施
- 2月12日～20日
  聖マリア病院臨床研修プログラム「国際保健コース」のラオスフィールド研修5名受け入れ
- 3月24日～27日
  日本助産学会「ラオス国スタディーツアー」18名受け入れ
- 4月7日
  野田教授メモリアル研修センター開所式

ISAPHの役員名簿

役職	氏名	備考
理事長	小早川隆敏	東京女子医科大学名誉教授
理事	深見　保正	元福岡県企業管理者
理事	湯川　武	早稲田大学研究院教授
理事	樋口　敬記	(株)梓設計九州支店特別顧問
理事	浦部　大策	聖マリア病院国際事業部
監事	竹之下義弘	弁護士（東京六本木法律事務所）

入会と寄付のお願い

ISAPHの活動を発展させるために、一人でも多くのご入会、ご寄付をお待ちしております。

法人会員

入会　30,000円　年会費　30,000円

一般会員

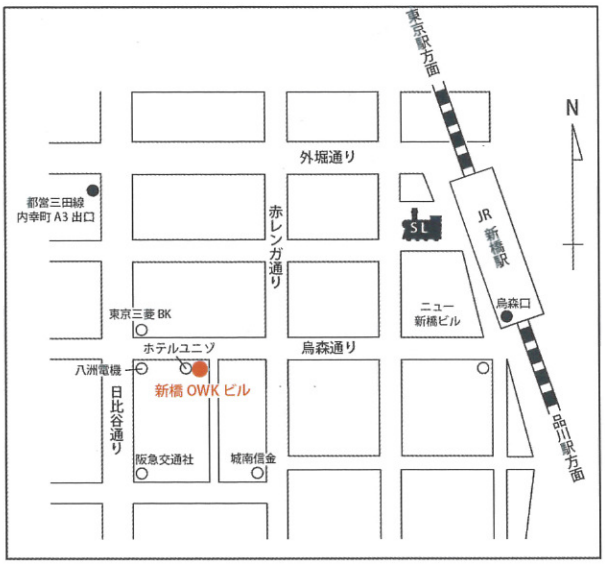
入会金　3,000円　年会費　3,000円

入会ご希望の方、ご寄付をお願いできる方は、下記東京事務所までご連絡いただければ幸いです。

特定非営利法人ISAPH　東京事務所
〒105-0004 東京都港区新橋3-5-2
新橋OWKビル3階　NPO法人ISAPH
TEL 03-3593-0188　FAX 03-3593-0165
E-mail tokyojimusho@isaph.jp
URL http://isaph.jp/index.html

振込先

郵便振込　口座名　特定非営利活動法人ISAPH
口座番号　00180-6-279925



ISAPH Newsletter 第8号　編集スタッフ
磯東一郎　槇村さおり　中野博行

＊本ニュースレターの発行は、社会医療法人雪の聖母会聖マリア病院にご協力を頂きました。